縄文時代

縄文時代の貝塚からアワビ、サザエの殻が多く出土
（志摩・大築海、館山・なた切洞穴、対馬・志多留）

東北地方の海岸から鹿骨製アワビオコシが多数出土

弥生時代

西暦前300年頃
白浜遺跡から大量のアワビの殻とともに鹿骨製アワビオコシが出土

壱岐・カラカミーハルノツジ、福岡・夜臼遺跡、山口・吉母浜などから鯨骨アワビオコシが出土

西暦後220年～265年　魏（中国）
「魏志倭人伝」に「今倭水人、好沈没捕魚蛤……」とある

奈良時代

720年頃
この頃成立した日本書紀によれば、允恭天皇14年のころに「男狭磯（おさし）」という海士が大アワビを取ったとある

745年
平城京跡から出土の木簡にアワビの記事がある
「志摩国英虞郡名錐郷戸主大伴部国万呂□同部得嶋御調鮑羅鮑六斤天平十七年」

759年
万葉集に「あま」が非常に多く歌に詠まれる
「あごの浦に　船乗りすらむ　おとめらが
　赤裳のすそに　潮満つらむか」
「みけつ国　志摩の海人ならし　真熊野の
　小船に乗りて　沖へ漕ぐみゆ」
「伊勢の海人の　朝な夕なにかづくとふ
　鮑の貝の　片思いにして」

平安時代

927年
延喜式に"潜女"という言葉が見える
「……凡志摩国供御贄潜女三十人……」

1000年頃
「枕草子」に男の海士が女の海女を虐待していると記している

鎌倉・室町時代

1200年頃
「倭姫命世紀」に「国崎潜女」の記載がある

～1500年
伊勢神宮関係の文書に海士・海女の活躍を知らせる記載がある

1544年
天文16年に記された「片田村三蔵寺世代相伝系譜」に娘海女が溺死したとの記載がある

鳥羽の白浜遺跡をはじめ、この地方の弥生時代の遺跡からはアワビの貝殻が多数出土している。

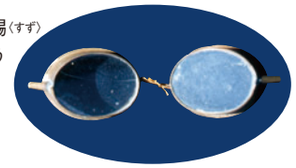
江戸時代の宝永７年（1710）に現在の鳥羽市国崎から伊勢神宮へアワビを奉納した文書。

歌麿が描く海女の浮世絵。

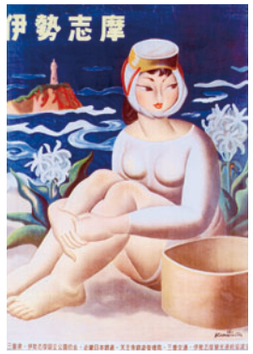
明治16年（1883）に作成された「三重県水産図解」に描かれたアワビ漁の図。ヒキザオをたよりに海に潜る海女の姿が描かれている。

「三重県水産図説」に描かれた海女の姿。当時はまだ上半身が裸であったことがわかる。

初期の磯メガネは真鍮（しんちゅう）や錫（すず）で作られ、左右の目をそれぞれ被うゴーグルのような形だった。



昭和初期に観光土産として大量に発行された海女の絵はがき。



伊勢志摩観光を象徴する海女の姿は観光ポスターにも描かれた。

江戸時代

1666年
寛文６年に記された「訓蒙図彙」に蜑人の図として女あまの絵がある

1713年
正徳３年の「志陽略史」に「潜婦被女」とある

1799年
寛政11年の「日本山海名産図会」に「伊勢国和具浦……必女海人を以ってす……」とある

中国（清）向けに「俵物三品」（干し鮑・煎り海鼠・鱶鰭）が大量に輸出される
干し鮑志摩国は主産地であった

伊勢神宮の御師がノシアワビを全国に配布した

歌麿や豊国をはじめ海女の姿が浮世絵に多く描かれた

明治・大正時代

初め頃
海女が潜水用のメガネを使い始めるが、とれすぎになり一時禁止されるも明治末には定着する

1883年
「三重県水産図解・図説」に海女が克明に描かれている

1890年頃
志摩の海女、朝鮮半島へ行くようになる

1898年頃
海女が白い磯着を身に着けて潜るようになる

「海女」という文字が紀行文などで定着する

昭和時代

1925年頃
海女の絵はがきが観光土産として作られる

1955年頃
海女がゴム製のウエットスーツを使い始める

1965年頃
志摩地方のアワビが減少し始める
この頃、伊勢・鳥羽・志摩地方の観光ポスターに海女をモチーフにしたデザインが多用される

1980年頃
海女の高齢化と後継者不足がいわれはじめる

2005年頃
海女の暮らしに接する「観光・海女小屋体験」が各所で始まり人気を呼ぶ